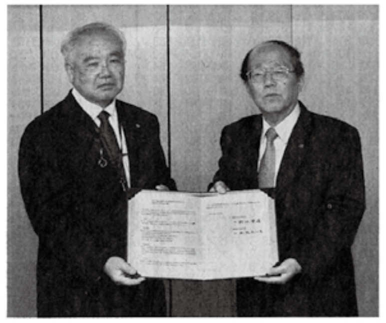
新聞記事に見る徳島大学の地域連携事業

地域振興・活性化へ貢献
県保証協と徳島大が協定


業務連携協定を締結した里見会長㊧と野地学長＝徳島市の徳島大本部

徳島県信用保証協会と徳島大は20日、地域創生に向けた業務連携協定を締結した。創業支援など地域振興・再生や、地域活性化の担い手育成を協力して行う。協会が同様の協定を締結するのは四国大、徳島文理大に続いて3例目。

徳島市の徳島大本部で締結式があり、里見光一郎会長と野地澄晴学長が協定書に署名した。里見会長は「協会が持っている創業支援、金融支援、経営支援のノウハウを活用し、協力して地域活性化に貢献していきたい」と話し、野地学長は「大学も収益を上げられるベンチャー企業の設立を考えており、その部分でも協力をお願いしたい」と期待した。

具体的には協会が、徳島大と徳島新聞社の連携プロジェクト・まちしごとファクトリーなどに参画し、創業支援に取り組む。また、徳島大の授業で協会職員がビジネスプラン作成を指導することなども検討している。（三木研司）

平成28年5月21日［徳島新聞］

特色生かし活性化を
小松島で60人が意見交換

まちしごとファクトリー

小松島市の課題について考えながら、起業などによる地域活性化策を探る「小松島フューチャーセッション」（徳島新聞社など主催）が1日、同市小松島町の小松島みなと交流センターKocoloであり、市内外の高校生や社会人ら約60人が参加した。

市職員が、農水産物の生産が盛んなことや豪華客船の寄港が可能な港湾があるといった市の特色について説明した。参加者は10グループに分かれ、「小松島で仕事づくり&創業」をテーマに議論。「国鉄小松島線跡の遊歩道をランニングしている人をターゲットに、ランナーズステーションを設けてはどうか」「小松島ならではの職業が体験できる子ども向けの施設があれば」などの意見が出ていた。

徳島大理工学部1年の萩原裕基さん(20)＝兵庫県伊丹市出身＝は「小松島には大きな港やおいしいまんじゅうなどがあり、面白い町だと感じた。今回の参加を機に小松島を応援していきたい」と話していた。

セッションは徳島大と県信用保証協会、徳島新聞社の連携プロジェクト「まちしごとファクトリー」の一環。30日からは、起業を目指す人のビジネスプラン作成を支援するワークショップ「まちしごと実験室・小松島編」（全3回、無料）が始まる。問い合わせは同ファクトリー実行委（電088（656）9752）。（谷利彦）

小松島の活性化策について意見を交わす参加者＝小松島みなと交流センターKocolo

平成28年10月2日［徳島新聞］

徳島大学・徳島県信用保証協会・徳島新聞社連携事業

まちしごとファクトリー

地域の共感 事業の支え

パネルディスカッション

徹底的にニーズ調査 白川さん

「みんなの孫プロジェクト」代表 水柿大地さん
「困ったことはなんですか」社長 白川 將さん
司会・田口 太郎徳島大准教授

まちしごとのつくり方について考えたパネルディスカッションの様子＝徳島大常三島キャンパス

「しっかり仕事」大切 水柿さん

水柿大地さん

田口太郎准教授

白川將さん

まちしごと実験室 3人の活動紹介

まちしごとファクトリーでは本年度、三好市、佐那河内村、小松島市の3地域で住民のニーズを探り、事業計画の立て方を学ぶ「まちしごと実験室」を開いた。延べ30人の受講生の中から、まちしごとの実践に向けて一歩踏み出した3人の取り組みを紹介する。

佐那河内実験室

藍染通じ「青の文化」発信

永原 レキさん(35)＝海陽町

小松島実験室

サロンシェア 自立へ歩む

出葉 美耶さん(39)＝勝浦町

にし阿波実験室

好きなことで"休日起業"

新田 慎典さん(36)＝三好市池田町

取材を終えて

担い手増やす取り組みを

17年度の取り組み

2017年度のまちしごとファクトリーは次のように変わります。

1. 徳島大フューチャーセンターを拠点とします

2. 徳島大の授業科目となります

3. 県内のさまざまな地域と連携します

4. 「とくしま創生アワード」と連携します

平成29年2月4日［徳島新聞］

大学

グローバル時代をひらく

徳島大学 フューチャーセンターA・BA

開放空間で自由に議論

開放的な雰囲気やユニークな内装で、活発な議論を促す

徳島大学は昨年9月、「フューチャーセンターA・BA（アバ）」という耳慣れない施設を開いた。フューチャーセンターは様々な立場や専門分野の人がアイデアを出し合い、未来に向け課題解決に取り組む空間だ。海外で開設の動きが広がるが、日本の国立大学が常設するのは初めて。産学協働の場として活用するほか、世界に通用する課題解決型の人材育成を目指す。

■■■

明るく壁のない開放的な空間に、色とりどりで様々な形の机や椅子が並ぶ。無造作に置かれた3次元（3D）プリンター、壁を敷いた和風のスペースや、キッチンを備えたカフェカウンターも。混沌としていて、何をするための施設なのか見当がつかない。

「自由な発想を引き出して実践に移すためのデザインです」。開設を主導した地域創生センター長の吉田敦也教授は説明する。人数やテーマに適した場所でミーティングをし、良い案が出ればその場で創作に移る。取り組みのスピードが上がり、モチベーションの維持にもつながる。

運営面では「多様性」を重視。教員や学生だけでなく他の研究機関や自治体、企業、地元住民など様々な人を巻き込んだ形での利用を進めるの。代表例が徳島の伝統文化である人形浄瑠璃をデジタル技術で振興するプロジェクト。魅力をPRできる人材を育てる科目「スチューデント・アンバサダー」では、アバでアイスカッションや成果発表を公演を開いたり、3Dプリンターで人形の部品を作ったりと、多様な活動を支える。

■■■

授業でも活用する。地域の課題解決を目指す「社会にどれだけのインパクトを与えたか」が、この施設の価値を決めると考えています。利用者数がベンチマークではありません。成功事例を早くつくれるように、取り組みを進めていきます。

ビジョン　吉田敦也教授

未来の課題 解決目指す

「フューチャーセンター」は北欧発祥の施設ですが、世界中で開設の動きが広がっており、近年では富士ゼロックスや富士通など日本企業でも開設するところが増えてきました。「未来の課題解決を目指す」という視点は、これからの大学教育には必要なものです。

開設から半年以上たちましたが利用件数は少なく、学内から「まだモタモタしているのか」と怒られることもあります。しかし、稼働率を上げるために、ここをただのカフェや貸会議室のように使ってほしいとは思いません。明確なテーマや目的を持ったプロジェクトでの活用を目指します。

「社会にどれだけのインパクトを与えたか」が、この施設の価値を決めると考えています。利用者数がベンチマークではありません。成功事例を早くつくれるように、取り組みを進めていきます。

徳島大は4月、農業の応用可能性を探る「生物資源産業学部」を新設した。6次産業化や医学分野への応用を目指す。企業や行政などの協働は避けて通れないテーマ。地域の知恵を結集する「触媒」として、アバにかかる期待は大きい。（畠山周平）

平成28年6月15日［日本経済新聞］

釜で炊いた上勝町産の新米を食べる来場者＝徳島市の徳島大学常三島キャンパス

上勝棚田の新米に舌鼓

徳大で「マーケット」

県産の野菜や加工品などを販売する「ファーマーズマーケット」が24日、徳島市の徳島大学常三島キャンパスで開かれ、学生や家族連れらでにぎわった。

農家や高校生、地域おこし協力隊など17団体が出店。おからを使ったアイスクリームや自家製ジャムを添えたパンケーキなどが人気を集めた。

上勝町の棚田で収穫された新米が炊きたてで振る舞われ、浦庄小6年の佐々木小夏さん(12)は「もちもちしていておいしい。マーケットにはいろんなものがあって楽しい」と話した。

マーケットは同大地域創生センターなどが主催し、昨年12月に続き2回目。学生や事業者、地域住民らの出会いの場となるよう、年に数回開くことにしている。（三浦麻衣）

平成28年9月25日［徳島新聞］

阿波晩茶とタマネギを使ったプリンを味わう参加者＝上勝町福原の月ケ谷温泉

阿波晩茶の効能学ぶ

上勝 生産者ら24人参加

徳島大地域創生センターは12日、上勝町福原の月ケ谷温泉で阿波晩茶に関する講座を開いた。町内で開いている「上勝学 上勝eatラボ」の一環。町内の晩茶生産者ら24人が参加し、同大薬学部の福井裕行特任教授らから、花粉症などのアレルギーに対する晩茶の効能などについて学んだ。

福井教授は、アレルギー発症を抑えるのに乳酸発酵させる晩茶の成分が有効だとの研究結果を説明。「皮膚や粘膜の症状に効く成分を含む食材と、晩茶を一緒に取ると効果が上がる」と訴えた。

同温泉の奥崎晃一料理長らが考案した健康料理の試食もあり、参加者は、タマネギのカラメル風ソースをかけた晩茶プリンなど5品を味わった。

同町福原の農業吉野大地さん(31)は「分かりやすく勉強になった。いろんな情報を活用して、よい晩茶づくりに取り組みたい」と話した。（松村万由子）

平成29年2月13日［徳島新聞］

札所の歴史・伝承学ぶ

県・徳大 遍路ツアー始まる

明大講座生

石段を上がって本堂に向かうツアーの参加者＝阿波市市場町の切幡寺

県と徳島、明治の両大学が開いている生涯学習講座の受講生らに、四国遍路文化を学んでもらうフィールドワークツアーが17日、鳴門市大麻町の四国霊場1番札所・霊山寺を皮切りに始まった。19日まで。

県外から12人が参加。初日は霊山寺と10番・切幡寺（阿波市）を訪れ、周辺の山々の紅葉を楽しみながら、本堂で願掛けをした。

バスでの移動中は、四国遍路研究者のモートン常慈・徳島大准教授らが、各札所の歴史や伝承を紹介した。

埼玉県川口市の稲垣ミサヲさん(75)は「全ての札所は回れないけれど、遍路文化と歴史が垣間見えます」と話していた。

18日は66番・雲辺寺（三好市）と8番・熊谷寺（阿波市）、19日は2番・極楽寺（鳴門市）と3番・金泉寺（板野町）を訪れる。

3日に都内の明治大で開いた公開講座「四国遍路の世界」の一環として行っている。（石川浩行）

平成28年11月18日［徳島新聞］

美波と阿南

沿岸と内陸 住民連携へ

津波防災タウンミーティング

沿岸部と内陸地の連携による津波防災について話し合ったタウンミーティング＝阿南市福井町の福井公民館福井南分館

沿岸部と内陸地が連携し、津波防災などについて考えるタウンミーティング（徳島大地域創生センターなど主催）が18日、美波町由岐地区と阿南市福井町小野地区であり、両地区の住民ら50人が交流を深めた。

美波町西の地の由岐公民館で事例報告などがあった。同センターの井若和久学術研究員らが、南海トラフ巨大地震による津波で由岐湾内地区は99％が浸水するとされ、地元の自主防災会が高台移転を想定した住宅団地のデザインコンペを行ったことなどを説明した。

農山漁村の活性化などに取り組む熊本大の徳野貞雄名誉教授（農村社会学）は、由岐湾内、小野各地区の調査結果から、高齢者の子や孫の世代の6、7割は徳島市以南に住んでいることを説明。「日頃のつながりが密なほど被災後の復興も早くなる」と訴えた。

参加者は、バスで小野地区の福井公民館福井南分館へ移動し、意見交換。由岐地区と小野地区は古くから住民同士の交流があったことを振り返り、今後は共同して防災訓練を行うことなどを話し合った。（千里達彦）

平成28年12月19日［徳島新聞］

タウンミーティングで講演する紺野教授㊨＝徳島大常三島キャンパス

徳大で集会

少子高齢化対策 大学の役割大切

多摩大大学院教授が講演

地域の将来について考えるタウンミーティング「地域を創るフューチャーセンター」（徳島大主催）が29日、同大常三島キャンパスであり、行政やNPO法人の関係者ら約70人が参加した。

多摩大大学院の紺野登教授が講演した。少子高齢化への対応として「より大きな価値観の変化や、外部からの視点が重要になっている」と指摘。大学が地域住民や企業、行政をつなぐ役割を果たし、対話によって地域の社会的イノベーション（革新）を生み出す必要性を訴えた。

その後、参加者全員で徳島に人を呼び込む仕組みなどについて議論。「大学生が神山町に住み、農作業を体験しながら大学に通う」「地震や津波に強い研究者らが集う地域にする」などのアイデアが出た。（坂田佑耶）

平成28年1月30日［徳島新聞］

「事前復興」理解深める

徳島市で津波防災シンポ

津波防災をテーマにした地域シンポジウム（徳島大地域創生センター主催）が28日、徳島市の徳島グランヴィリオホテルであった。約200人が参加し、復興の道筋をあらかじめ考えておく「事前復興」など大規模災害に強いまちづくりへの理解を深めた。

徳島大大学院理工学研究部の山中英生教授ら4人が津波防災を考慮した土地利用について、2013年度から4年間研究してきた成果を報告した。

山中教授は、津波被害が想定される区域内にある親の家の近くで、その子どもが高台や非浸水域などの安全な場所に住む「リスク分散型近居」を紹介。「車で10分程度の距離ならば普段の暮らしでも同居並みであり、被災時には支援や生活再建が短縮できる」と訴えた。

奥嶋政嗣准教授は、南海トラフ巨大地震の津波浸水想定で浸水深が2㍍以上の地域では木造住宅が全壊する可能性が高いと指摘。該当する世帯を浸水深2㍍未満の同地域内に移転誘導すれば「家屋の耐浪性の強化や避難施策の充実などで対応でき、既存の都市機能を維持することが可能になる」とした。

津波防災をテーマに、災害に強いまちづくりについて学んだシンポジウム＝徳島市の徳島グランヴィリオホテル

東京大学生産技術研究所の加藤孝明准教授の講演では、事前復興の重要性について「全ての災害に通用する処方箋はない。被災時に地域をどう復興させていくか、選択の幅を広げられるよう住民主導で考えてほしい」と強調した。

パネル討論もあり、加藤准教授ら6人が「津波に対する地域の安全水準をどう設けるかなどの社会的合意が必要」「防災だけを考えず、安心で住みやすいまちづくりを進めなければならない」などと意見を交わした。（笠井理）

平成29年3月1日［徳島新聞］

文部科学省
COC＋事業に
関する報道

徳島大生の長期インターンシップ

どんな経験？ 何を学んだ？

徳島大生が、県内の企業・団体で長期の職業体験をした「インターンシップ事業」。徳島新聞社を含む7事業所で行われ、35人が参加した。約半年の期間中、学生たちはどんな経験をし、何を学んだのか。2社のインターン生に話を聞いた。

具体的イメージつかむ

就職活動へ 自分再確認

医療用プラスチック製品などを手掛ける大塚テクノ（鳴門市）。総合料理学部3年納多里奈さん（21）ら4人が、企業の採用説明に使う新たなパンフレットとプレゼンテーション資料を作成した。

企業研修の後、これまでのパンフレットや資料の改善点を学生目線で洗い出した。社内の雰囲気が伝わるよう写真の枚数を増やし、全ての開発部門を紹介して就職後のイメージを抱きやすくした。

全員でアイデアを出し合い、作業は順調に進んでいたが、納得の出来だったプレゼンテーション資料のやり直しを指示された。「会社が求める『根本的な変更』に応えられていなかった。既存の資料をベースにして、独自のアイデアが不足していたと思う」と納多さん。

「絶対納得のいく資料を作ろう」と仲間をもり立て、話し合いと作業を再開した。社員紹介や、内容を振り返るクイズの導入など工夫。社内で高い評価を得るものに仕上げた。

「興味のあるもの作りの会社について知りたい」と考えたのが参加の動機。「社員に話を聞くと、ものの作りへのやりがいや信念を持っていた。私もこう動きたいと具体的に思えるようになった」

インターン生のリーダーを務め、新たな気付きもあった。「全員のスケジュールや仕事の管理がうまくできた。傳意なことが分かり、ビジネスマナーも身に付いたので就職活動に自信が得られた」と笑顔を浮かべた。

プログラミングスクール「クリップ」（徳島市）は5人が参加。工学部4年元田遥さん（22）は、プログラミング教育の認知度を高めるイベントの企画・運営に取り組んだ。

アイデアの基本とするため、小学生100人へのアンケートを計画。学校への協力依頼や集計など、少なくない事務作業をこなした。研究やアルバイトとのスケジュール調整にも苦労したが、付随先を使ってリスト化する工夫で乗り切った。

アンケートを基に仲間と話し合いを重ね、親子参加型の体験イベントを実施。自ら手掛けたプログラムは、子どもたちに好評だった。「仲間と目標に向かって努力するのが楽しく、充実感が得られた」と振り返る。

社会人の働き方を体験し、「将来、どう働きたいか」という視点が生まれた。「やりがいは大切」と話し合いを重ね、親子が見つけられると思う」と語る。

自分自身の特徴や不得意分野など、大学生活で得られない気付きもあったと言う。「インターンに興味がある人は、長期短期問わず挑戦することを薦めたい」と話した。

（橋本真味）

【上】中学生にプログラミングを指導する、クリップのインターン生（中央）＝徳島市内【下】採用活動用のパンフレットを作成した、大塚テクノのインターン生＝徳島大学三島キャンパス

平成29年1月29日［徳島新聞］

県内就職の魅力をPR

大学生向けセミナー

若者に徳島県内での就職を考えてもらうセミナー「徳島の魅力、徳島で働く」が23日、徳島市の四国大交流プラザであり、大学生に地元で就職する魅力をPRした。

県内大学や県、経済団体などでつくる「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」が主催。サテライト会場の徳島大、徳島文理大と合わせて学生63人が参加した。

徳島経済研究所の田村耕一専務理事が、LEDや住宅用ドア、レンコン加工品など、県内に生産量日本一が数多くあることを紹介。「介護や医療が充実し、自然が豊かな徳島での就職をぜひ考えて」と呼び掛けた。

県内企業に就職した会社員や看護師ら4人の体験発表もあり、地元で働く魅力について「物価が安く実家が近いので、生活や子育てがしやすい」「もともとある交友関係を人脈にして仕事と生かすことができる」「古里のために貢献できる」などと話した。

（河野大樹）

平成28年11月24日［徳島新聞］

郷土愛着心育み 県内就職を促進

徳島大生の県内就職率アップに向け、同大は新たな教育計画「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」を設けた。徳島への理解や愛着を促す講義を通じて、県内就職率を2014年度の34・4%から19年度までの5年間で10%引き上げるのが目標。16年度から全学部の1年生に導入している。

徳大が教育プログラム

教育プログラムは「地域理解のための教養科目」と「専門教育プログラム」に大別している。

地域理解のための教養科目（2単位）は、主に1年生が履修。「空海と歩く～歩き遍路の世界」など、徳島の文化や環境に関連する教養教養科目（一般教養）27科目の中から1科目を取得した後、専門教育プログラムに進む。

専門教育プログラム（16単位）は2年生以上が履修する。各学部の専門科目で構成し、同大は17年度の導入に向けて内容を検討している。

県内の企業や事業所で約1カ月、職業体験する「寺子屋式インターンシップ」（2単位）も盛り込んでいる。全プログラムを終えると、修了証が交付される。

徳島大は、就職活動の際に、修了証を活用できるような制度の導入について企業などと検討していく。

教育プログラムの受講は任意。取得した単位の一部は、卒業に必要な単位として認められる。現在、プログラムに参加しているのは1年生133人。規模は19年春に就職する。

今年度から全学部で導入

総合科学部1年の河野あさなさん（18）は「県内での就職を考えているので、就活で役に立つなら最後まで挑戦してみたい」と話している。

（三浦麻衣）

平成28年6月3日［徳島新聞］

徳島大

3Dプリンターで木偶制作

都内で浄瑠璃披露

徳島大地域創生センター「ジウム」を開き、同大大学院の学生らが3Dプリンターなどで制作した阿波人形浄瑠璃を披露した。

同大大学院理工学研究部の浮田浩行講師（画像処理・計測）のグループが民間企業と協力し、プラスチック製の女形の木偶1体と衣装を制作。3Dプリンターやコンピューター設計支援ツール（CAD）など最先端の機器を活用した。

三好市出身の人形遣い・勘緑さんが主宰する木偶舎による「八百屋お七」が上演され、木偶は主人公お七として登場。勘緑さんらに操られ、恋に身を焦がす女の情熱を約70人の参加者に伝えた。

勘緑さんと頭の仕上げを担当した資生堂トップヘア&メーキャップアーティストの計良宏文さんらによるトークショーもあった。勘緑さんは「まだまだ改良点はあるが、今後、木偶が安く作れるようになれば学校などにも導入され、伝統文化を守っていくことにつながる可能性はある」と期待していた。

22日午後1時半からは徳島大常三島キャンパスで同シンポジウムのビデオ上映がある。

（伊藤典文）

3Dプリンターで作った木偶が披露された徳島大地域交流シンポジウム＝東京・六本木

平成29年2月19日［徳島新聞］

3D印刷木偶 活用探る

徳島大で地域交流シンポ

3Dプリンターで作った木偶による阿波人形浄瑠璃の活性化策などを話し合う地域交流シンポジウム「伝統をメイク」が22日、徳島市の徳島大常三島キャンパスであった。18日に都内で開かれた「3Dプリンター木偶」を使っての浄瑠璃公演を受け、関係者約40人が今後の活用策などを話し合った。

徳島大大学院理工学研究部の浮田浩行講師らが3Dプリンターで制作した木偶がお披露目され、浮田講師と徳島大の吉田敦也地域創生センター長、三好市出身の人形遣い・勘緑さんらが対談した。

3Dプリンターで安価な木偶ができることに対し、勘緑さんは「高校生や、これから浄瑠璃を勉強してみようという人にとって、手の届く存在になることは良いことだ」と評した。木偶がリハーサル中に壊れるトラブルがあったことも紹介され、浮田講師らは「今後、強度不足という問題を解消する必要がある」と話した。

（三浦麻衣）

3Dプリンターで制作した木偶の活用策を話し合ったシンポジウム＝徳島大常三島キャンパス

平成29年2月23日［徳島新聞］